私が出会った神

Paula May

善悪を裁く神？
杖をついたお爺さん？
いやいや、私の出会った神は...

プロローグ

はじめに、皆さんは夢の内容をどれだけ覚えていられますか？

「爆睡しちゃって夢まったく覚えてないよ」という人もいるけど、実は人は必ず寝てる間に夢を見ていると言われています。つまり、夢を見ている人と見ていない人がいるのではなく、夢を覚えていられる時と覚えていられない時があるだけなのです。

私はある時期を境に、不思議で興味深い夢を見るようになりました。もっと多くの夢の内容を起きた後も覚えていたい！という想いから「夢を日記」をつけるようになりました。夢の内容がびっしりと書かれたその夢日記は、いまでは10冊近くにものぼります。

たくさんの不思議な内容の中から、今回はとてもユニークでユーモア溢れる、かと思えば情熱的な、私が出会った「神」についてお話します。

出会いの前触れ

夢の中で神と出会う前、とても不思議でかつてないほどリアルな夢を見た。

それはある昼下がりのこと。
ひらひらと風に踊らされる白いカーテンを見ていたら、いつの間にか眠りに落ちた。
少し経っただろうか。
「あなたは3回同じ音を聞くと...」
そう耳元で、とても優しい女性の声に言われたが最後が聞き取れなかった。その言葉に起こされるかのようにゆっくりと起きると、外で誰かがDIYでもしてるのか、トントントンというトンカチの叩く音が聞こえてきた。

トントントン...2回目、同じ音とリズムで音が鳴る。
トントントン...3回目が鳴ると、何が起きるんだろう！という私の期待を裏切り何も特別なことは起きなかった。

「なーんだ。なんも起きないじゃん。」
ガッカリしながら重たい瞼を再び閉じて、また眠りについた。気づくと私はトンネルにいた。「明晰夢」と言うべきか「幽体離脱」と言うべきか。オカルトやファンタジーが苦手な人には受け入れられないかもしれない、この2つの言葉がピッタリだった。日常とは何も変わらない感覚。私の名前は覚えていたし、自分が何をしてる人でどこに住んでて、そしてさっきまでベッドの上にいたこともちゃんと知っていた。五感も普通にある。
「お昼寝したら変なとこに来ちゃったな。」
まったく動揺することなく周りを観察した。薄暗いけど、きらきらするものがたくさんあり不思議と心地の良い気分になった。すると、優しそうなお姉さんが3人出てきて自分たちの背を高くしたり低くしたりしていた。
「ほらあなたもやってみて」
そう言われて私も自分の背を高くしてみた。どうやってって？イメージしただけ。自分の背が高くなるとイメージした、意図しただけで背が伸びたのだ。私は背が低いのがコンプレックスで、いつも背が高い人はいいなってずっと思っていた。この時は念願叶って背を伸ばすことができた。...けど、何かが違った。慣れていないからなのか分からないけど、「この視界は好きじゃない」とただそう思った。結局、私は元の背に戻すことにした。

コンプレックスだと思っていたものが、実は自分がなりたいものだった。

なんだかんだで、いつもの自分が良いと思ったのだ。
そのままトンネルを進むと可愛らしいショートカットの女の子に出会い、何かを教えてくれたが

忘れてしまった。そしてまたそのまま突き進んでいくと、狭かった小さなトンネルがとても大きくなり、そこには村のような光景が広がっていた。みんな古代ギリシアのような、布1枚を体にまとっていてお洒落さを感じた。布1枚だと原始人のイメージがあったけど、むしろ高級感や優雅ささえ感じたのだ。
私はどこに行くか分かっているかのように、迷わず奥にある個室の部屋に入った。そこには、アフロディーテを人間にしたような雰囲気も容姿も美しい女性が、これまたセクシーさ漂う男性と密着中。少々面倒くさそうな表情で男性から離れたその綺麗なお姉さんは、フリップを持って私に近づいて来た。何も言われなくてもこの女性から出されるお題が最後のテーマだと気づいていた。

そして彼女が微笑みながら出したそのフリップにはこう書かれていた。

ーこの世界では、〇〇と言うことが大事

どうやら“〇〇”に入る言葉を当てろということらしい。
皆さんはなんだと思いますか？この問題を出されて私が真っ先に思ったのは、なんて簡単なんだ！でした。あまりの簡単な問題に、半ばワクワクしながらドヤ顔で大きく答えてやった。

「ありがとう、と言うこと！！！」

彼女はまたとても魅力的な微笑みを浮かべるとフリップに文字が現れ、こう書いてあったのだ。

ーこの世界では、“すき”と言うことが大事

彼女は相変わらず何も言わないまま素敵な笑顔だけを残し、パートナーの元へと帰っていった。
私は彼女のとんでもなく可愛い笑顔に魅了されながらも、「え？ありがとうじゃないの？なんで“すき”なの？」と混乱しながらその場で立ち尽くしていると、ゆっくりと自分の肉体に戻った。

そう戻ったのだ。

急に目覚めたのではなく、“自分”がゆっくりと“自分の肉体”に近づき重なるのを感じた。そして少しふわふわした意識が徐々にゆっくりとハッキリしだして、改めて目を開けた。

「コンプレックス」、そう決めつけたのは周りや自分の見方。
本当のあなたは今の自分がまるごと好き。

感謝と同じくらいに愛を伝えることはとても素敵で大切なこと。
もっと、愛を伝えあえる世界になりますように。

最初の出会い

「なんで“ありがとう”じゃなくて、“すき”なの？」
まだ少し納得できない感覚を残しつつ、私は目を覚ました。

小さい頃から、「ありがとう」と「ごめんね」を伝えることを大人から教えられる。でも「すき」という言葉は、告白の時でなければなかなか人には伝えられない。「パパ、ママだいすき！」「〇〇君、〇〇ちゃんだいすき！」そう素直に伝えられた時代はいつか過ぎ、大人になればたったの二文字が言えなかったり別の言葉に言い代わってしまう。「ありがとう」はとても便利で容易く、「すき」はハードルが高い。

「ありがとう」と「すき」について考えていると、またいつの間にか眠ってしまった。
一天国。
そう呼ぶに相応しい場所にいた。あたり一帯真っ白の中、真っ白な服を着た、白い長い髪のお爺さんと私がいた。座っているお爺さんの前に私が座っていて、何故か私は小学生くらいの女の子の姿になっていた。

これが私が記憶している、初めての「神」との出会いだった。

「あなたは地球で...」
そう言われた私はすぐに「“あなた”じゃなくて、ちゃんと名前で呼んで欲しいなー」と思った。思うのと同時に、その言葉が自分の中で響いて、おかげで神の最後の言葉が自分の心の声でかき消され聞こえなかった。この時、大人しく聞いていれば良かったと、今でも後悔している。
そして気づくとまた別の場所にいた。星の鮮明な輝きで照らされる大きな庭に、たくさんのアンティーク調のテーブルやイスがあり、まるでオープンカフェのようだった。誕生日でもないのに、ケーキやたくさんのプレゼントを様々な人からもらった。そんな中、“カフェのオーナー”らしき男性がある部屋から出てきた。容姿はというと、40代くらいで髪の毛は長く黒系の色。服はT-シャツとジーパンという、シンプルでありきたりなものだった。そして彼は私に3つの大きなトランクを差し出した。どうやらプレゼントらしい。その3つのトランクにはそれぞれ別のものが入っていた。

1つ目には大量の下着が。それを“まなちゃん”という友達が持ってきてくれた。
2つ目には大量の宝くじが。それを“ぽっぽん”という友達が持ってきてくれた。
そして3つ目には大量の風船が。そのトランクは初めから私の目の前にあった。

これらが意味しているのは何か？結果から言うと、下着は「女性性」、宝くじは「豊かさ」、そして風船は「平和」の象徴。私の潜在意識では女性性といえば下着、豊かさといえば宝くじで、

平和といえば風船だったためそのように現れたのだ。

ここで少し話が脱線するが、女性性＝花、豊かさ＝金塊、平和＝田舎だと思っている人が今回と同じ夢を見たのなら、きっとトランクの中身は変わっていたはず。(でも意味は同じ)
またそれぞれのトランクの前にいた友達にもちゃんと意味がある。まなちゃんは峰不二子を実写化したような女の子。女性性というエネルギーを人化すると、私の場合はまなちゃんという友達だった。そして豊かさがぽっぽんという友達だった。実際にこの子は、この夢を見た2年後くらいに苗字に「金」のつく男性と結婚し、夫婦でお店を営んでいる経営者。

こうして3つのトランクをプレゼントしてくれたオーナーらしき男性にお礼を言おうとしたら、自分の中に“何か”が溢れていっぱいになり、その“何か”を表現したくてしたくていてもたってもいられず、私は思わず彼にこう叫んだ。

「神様！愛してる！」

そう口に出して初めて、その“何か”とは“愛”だったんだと認識した。そして続けてこう言った。
「ありがとう！」
「どういたしまして、〇〇(私のフルネーム)さん。」
私の名前をフルネームでハッキリと言いながら、彼はまた部屋の中へと消えた。

何でもないような夢の中にあなたの概念が隠されている。
その概念をツールに、神はあなたに“何か”を伝えようとしている。

人にあげるものは自分へのプレゼント

人に何かプレゼントを選んで渡すとき、どんな想いで選び渡しますか？「相手」が女の子なら、まずは自分なりの女性らしいものを思い浮かべるだろう。「相手」が友達か家族か恋人かでもプレゼントは変わるだろうし、お祝いか記念日かでもプレゼントのグレードは変わるだろう。つまり、私たちは「相手」を対象にプレゼントを渡す。自分ではない「相手」を意識してプレゼント、いや、プレゼント以外のものも渡している。色々考えながら選び、渡す。そんなの当たり前って？そう、私もずっとそう思っていたの。...神が、人にプレゼントを渡すとはどういうことなのか？を見せてくれるまでは。

ある時の明晰夢。
学校のような廊下を歩き、すぐに見つけたこじんまりとした部屋に入った。2人の女性と1人のお爺さんがいた。部屋の壁のほとんどは黒板になっており、びっしりとたくさんの文字が書かれていた。残っているわずかなスペースにも、その“神”は必死で、そして全力で何かを書き続ける。びっしりと並んだ文字の中で1番印象的だったのが、「人間の寿命、3千年は保証します！」というもの。ただそれを見たとき、「でも、人がそう信じていないから(今は)そうなっていないんだ」という神からテレパシーを送られたのか、その文字に想いが乗っていたのか、私はそんな神の想いを受け取った。
次に、私は神にあるものを渡した。それは私から誰かへのプレゼントだった。「誰かにプレゼントを渡すとしたら、どんな物をあげる？」というお題で予め私が作ってきたようだ。重視したのは、その人の好きな料理であったことと料理の見た目。そのプレゼントを神に渡すと、こんなことを言いながらいくつかその料理に付け加えていた。

「自分(自分のこと)らしいからこれも付けよう♪」
そう言って豪華で素敵な絵のついた赤い棒のようなものを付け加えていた。

「そしてこれも自分(相手のこと)らしいから付けよう♪綺麗だし楽しくなるよね♪ワクワクするね♪」
そう言って更に加えたのが手持ち花火。火のついたその手持ち花火は、キラキラと輝きながら料理を一層華やかにしてくれた。

分かりにくいかもしれないが、私が誰かへのプレゼントを作ったとき意識したのが、まず「自分が相手に渡すんだ」という認識の上で用意したこと。綺麗に盛り付けたのは、「相手に失礼のないように・自分の綺麗な盛り付けを表現したかった」。もちろん、相手が喜んでくれるようにその相手が好きなアイテムを用意し綺麗に盛り付けた。だが神が誰かにプレゼントを渡すとき、そこには私が意識していなかった意図が存在していたのだ。

まず大前提として、神が誰かにプレゼントを渡すとき「自分が相手に」ではなく、「自分が自分へのプレゼント」という認識で渡していた。
プレゼントを渡す側である自分のことを「自分」と呼び、またプレゼントを渡す相手のことも「自分」と呼んでいた。
2つ目に、神はそのプレゼントに自分の好きなものを詰め込んだのだ。自分(自分と相手)の好きなもの盛り合わせ＝プレゼントらしい。だから神の渡すプレゼントは、自分と相手の両方がどっちもワクワクしたもの。
そして3つ目は、余計なことは考えずにただワクワクしながらワクワクしたものを加えていたこと。「相手はこれで喜んでくれるかな？」「綺麗に盛り付けられたかな？(綺麗に見えるかな？)」「料理も盛り付けも上手くやろう」そんな心配や力みが一切ない。見ているこっちも楽しくなるほど、神がプレゼントを完成させているその間には、ただただ“楽しい！”だけが存在していた。

“人にしたことは自分に還ってくる”とか“人にされて嫌なことは人にはしないように”という、相手＝自分の意味を持つ言葉が日本には存在しているけど、自分が相手に与えているものは実は自分が自分に与えているものなんだなと感じた夢でした。

楽しい！気持ちでプレゼントを選ぼう。
あなたがプレゼントを渡そうとしているその人は、　　実は自分自身。
自分と相手(自分)の両方が好きなものを選ぶと、ワクワク倍増！

闇ってかっこいいんだぜ！

また違う晩の明晰夢では、「光と闇について」神から教わったことがある。

私が真っ白な丸いものを持っていると、それを見ていた女性がボソッと言った。
「この子は“白い”と思っていたけど、“黒い”かも」
すると持っていた真っ白なものに、煙のように真っ黒なものが現れ、真っ白な煙と真っ黒な煙がマーブル状に混ざった。

そしてその様子を見ていた、ハゲに近いくらいの髪型のお爺さん(神)が誇らしげに笑顔でこう説明していた。
「闇はとても大きなエネルギーで力強い。それでいて大変複雑。」

何を言いたいのかと言うと、闇は力強い分、周りを巻き込む力が大きい。それが調和か不調和な現象として現れるかは、そのエネルギーを扱う存在次第。闇と認識されるエネルギー自体は一言で言えば「かっこいいんだぜ！」ということを神は語っていた。
私はこの夢から、例えばスポーツの番組を見ていると誰が勝つのか直観で分かるようになったのだ。何故って？大きな闇を感じた方がいつも勝つのだ。また勝つ以外にも、闇を感じた人がそのあとすぐ“世界初”や“前人未到”の何かを成し遂げる。
ちなみに一言で「闇」といっても、人によってそれに対するイメージは違うだろう。私の感じる闇のエネルギーとは、ゾクッとした畏怖感のある怖い感じ・どよっと重ため・気を固めるような触感、簡単に言うと「何この雰囲気...かっけー(゜Д゜)ゾク」なのだ。

だいたい私たち人間の言う光は、素晴らしくて素敵でキラキラしてて優しい“良いもの”。闇は恐ろしくて悲しくて酷い“悪いもの”。でも高次領域に存在する存在たちからすると、光は軽く柔らかく丸く、形は円で軽く回転している感じ。闇は重く圧があり固い。形は天と地を繋げるような真っすぐに鋭く伸びている。

人間が光と闇を語るとき「概念論」になりがちだけど、本当の光と闇とは「性質」なのだ。
どちらも素晴らしい異なった性質のエネルギー。

私が出会った神

私が体調不良の時に夢の中で、神が満面の笑みで大量のカルピスを持ってきてくれたことがあった。なんでカルピス？と思っていたけど、メッセージは「体にピース！(カルピス！)」だったんだとすぐに気づいた。そんな感じでユーモアを混ぜながらメッセージをくれることもよくある。

ある時には空に浮かぶ雲の上の神の部屋らしき場所にいて、そこにはたくさんのキラキラしたメルヘンちっくな可愛らしいものがたくさんあった。

全力で何かに情熱を燃やしているかと思えば、親父ギャグのようなことを言い出す。闇ってかっこいいんだぜ！と男らしい発言をしたかと思えば、ザ・女の子のような部屋で芸術を楽しんでいる。夢によって姿形もコロコロ変わるけど、そのエネルギーというか雰囲気に触れると私はいつもいつのまにか「神！」って認識しそう呼ぶの。

そんな様々な姿や一面を見せてくれる「神」ですが、その正体(本質)とは、実はとっても身近なものだったんですね。

ただ今回は初めての電子辞書の制作ということで、そろそろこの辺で終わりにしようと思います。「私が出会った神」いかがでしたか？覚えていないだけで、実はあなたも出会っているかもしれません。

この本を読んでくれた縁のあった方たちに心からお礼を申し上げます。最後まで読んで頂きありがとうございます。また機会があればぜひご覧ください。